

● 優秀賞

現代版組踊を通じて 「いのち」の大切さを伝える ～「平和の舞台」を沖縄と大阪狭山で。そして卒業後も～

おくだしゅういちろう
大阪府大阪狭山市立第三中学校 奥田修一郎

1 主題設定の理由

(1)「いのち」の大切さを問う平和教育の中で
人の命が軽視されるような昨今の風潮。特に、青少年が巻き込まれる事件・事故が増えている。今まさに、「いのち」の尊さの教育が大切である。未来に生きる中学生が、生命の尊さやその重さについてしっかり考えられるようにしなければならない。

本校では、重点を置いて指導していきたい価値項目の一つに、「生命の尊重」をあげている。この学習を深めるために、人権学習、特に平和学習の時間と特別活動それに総合的な学習の時間との関連を図りながら進めてきている。3年生では沖縄修学旅行でガマに入り、平和の集いを行い、夜には沖縄戦体験者である元白梅学徒隊の方々からのお話を聞く取り組みを行ってきた。そのねらいは、平和の大切さを知ることより深めて「生の意味を問える」学習をすることにある。元白梅学徒隊のAさんは、6月28日が近づいてくると同級生と死に別れたあの日のことが昨日のことのように思い出され、胸がつまり体調が悪くなるという。慰霊の日、生き残ってしまったことの申しわけなさに苛まれる日であるし、友のいのちの分だけ精一杯生きていこうと毎年友に語りかける日でもあるのだという。このAさんの思いを深く受けとめ、5年前にはじめて沖縄修学旅行でお会いした時いただいたメッセージ、「戦争に正義はありません。『命は宝』(ヌチドウタカラ)です。平和のメッセージを世界中にしっかり伝える事を心か

ら願うものです。次世代のあなた方が鍵を守ってください。」をその後も生かしていける取り組みを進めてきた。

(2)「平和の舞台」づくり

その取り組みの一つが、総合的な学習に3年生が1、2年生や保護者の方々に発表してきた「平和の舞台」だ。劇作りには4つの学習・活動があると考え。一つ目は作品を創るための情報収集、取材、編集をしていく学びである。二つ目は情報から考えたことを共有化するため、また、ちがいを認め合うための討議の中で合意形成をしていくための学習。三つ目は協働して一つの劇を創り上げる活動。そして最後に、自ら発信そして受信するための構えづくり、言い換えれば「動ける身体性」づくりをする活動である。これを「平和の舞台」に即していえばこうである。まず脚本をつくりセリフを考えていく中で、もう一度沖縄戦について調べ、手紙やメールなどで取材し、体験者の方々にも具体的なお話を聞く学習から始まる。次に、「実際自分だったらどうする？」という自分に突きつけた議題を考え、発表し合い議論し、共有化する作業をする。そして、劇はセリフだけでなく、歌、踊りを入れることで効果的にメッセージが伝わることを学び、全員で劇を創り上げていく。最後に、出来上がった脚本とセリフが、身体をどう使えば人に伝わるかをワークショップ式授業の中でお互いが検討し合うことと、観ていただいた方々の反応から次のステップを考えていけるようにする。

この学習・活動の中で学年全員が劇を創り

上げていくことが一番難しい。ややもすれば、一部の子どもたちの発表会になってしまう。そのため全員が裏方、全員が舞台役者という構成劇を創っていくことにした。

(3)現代版組踊とは何か？

組踊(クミウドイ)は、台詞、音楽、舞踊の三要素から構成された沖縄の伝統的な古典芸能のことである。これは18世紀に玉城朝薫が創り出したもので、国の重要文化財にも指定されている。この組踊を「演劇・バンド・ダンス」というスタイルに発展させた舞台を沖縄勝連町(現うるま市)の地元中高生が総勢150名で創っている。この舞台が現代版組踊である。話の筋は沖縄戦乱時代の勝連城主「阿麻和利」を逆賊ではなく、民衆のために尽くした英雄としてとらえ直した物語になっていて、演技あり、歌あり、ダンスありの沖縄版ミュージカルである。組踊の名の通り、琉球舞踊やエイサー、それに三線や太鼓の演奏など伝統芸能が登場する。

この勝連町の中高生(その中でも中心となるメンバーのことをキムカタキッズリーダーズという。以下リーダーズと略)と本校は5年前から沖縄だけの交流だけでなく、リーダーズを学校に招いての交流も行っている。彼らから学んだいくつもの歌と踊りは本校の学校文化にもなっていて、行事の時に踊られる。この踊りと歌があると、学年総勢180名も舞台に立つことができ、踊り終えた時には達成感・充足感・仲間意識が高められると考えた。その理由から、勝連町とも連絡を取り合いながら「平和の舞台」を現代版組踊として取り組んだ。

(4)「いのち」の大切さを問う劇づくり

「いのち」の大切さを伝える劇を創るために、一つには劇の内容が大事である。そしてもう一つは、舞台を総勢180名みんなで創り上げていく一生懸命さとひたむきさが大切になってくると考えた。実は後者は、前者と関連している。つまり、さきの元白梅学徒隊の

Aさんの話にもあったように、亡くなっていった人の生をつなぐためにも、今の自分達の生をいきいきとしていく必要があると考えたからだ。毎日が退屈で生きる意味が見いだせない自分たちに、「いのち」を大切さを伝える劇は創れない。劇づくりをする前に、またその中で自分たちの日常生活を振り返り、自分と自分の生活をまず見つめ、仲間と語り合い、仲間とつながっていくことが何よりも大切なこととしてとらえた。その築き上げた「信頼」「絆」が舞台で表現できれば、自分たちが感動できるし、人にも感動を与えられると考えた。

2 全体構想

(1)居場所づくり(子どもたちの実態をふまえて)

生命の尊重を重要な価値項目にあげ、学習を進めていく前提に、今日の前にいる子どもたちにとって学校が楽しいところになっているかどうかが問われる。では「楽しい」とは何かであるが、「自分の個性が発揮でき、認め合うことができる仲間がいる」ことではないか。言い換えれば「学校に自分の居場所がある」こととして考える。ここでの居場所とは一人ひとりが違うからこそ関係が豊かになるようなつながりをいう。具体的には

- 1) 自分の弱さが出せる、本音がぶつけられる。失敗や試行錯誤が許される人間関係がある場所であり、
- 2) 自分たちの自主性が認められ、活動の主人公となれる保障がある場所であり、
- 3) 同年代や先輩・おとなから自分の進路を切り広げる勇気と見通しを与えられる場所であると考えた。

その中でも、まず1)の場所づくりに1年生から取り組んできた。その方法は、一つは班ノートの活用ともう一つは宿泊行事をきっかけとしたクラスミーティングである。1年

生の頃は仲間関係で悩んできた子どもたちも、自分のこと、自分の生活を見つめ、少しずつ仲間と語り合うことができるようになり、クラス・学年が居場所になっていった。クラスミーティングは、1～3年の宿泊行事をきっかけにして、普段の学活の中でも行った。

2) に関しては、1年生時から委員会中心に自主的活動を保障してきた。特に3年では新たな組織である「学習・表現部」を立ち上げ、より自主性のある活動を行えるようにした。

3) 総合的な学習とたくさんの方と出会い、話を聞くだけでなく、活動を共に行う場面を多く設けるようにした。3年生時は、先輩から「進路リレートーク」で進路選択で何が大事を聞き取り考える活動を行った。また、特に大きいのはリーダーズとの交流である。多くの時間が取れるように設定した。

(2) 平和の舞台をつくるために

劇づくりの4つの学習・活動は社会科の授業と平和教育の授業とを関連化させて行えるようにした。

(3) 現代版組踊を創っていくために

歌・踊り・演技のある現代版組踊を創っていくためには、ある程度長いスパンの練習と取り組みが必要である。そのため三線・歌・踊りは2年生からの選択授業の中で練習取り組みを進めていった。踊りは琉球舞踊だけでなく、エイサーそれに日本舞踊、河内音頭にもチャレンジできる時間を多く設定していった。また、勝連町のリーダーズからも練習ビデオを送ってもらい、練習していけるようにした。

(4) 「いのち」の大切さを問う劇づくり

劇を創る前に、沖縄戦体験者の方々との出会いを大切にできる学習とともに、修学旅行後も体験者の方々との交流が続けられるようにした。

総合学習の発表だけで終わるのではなく、継続的にこれまで学んだことを発信できる場

を多く持つようにした。その際、観ていただいた感想・意見を子どもたちにフィードバックして、自分たちの活動を自己評価できるようにした。

3 研究の仮説

- (1) 学校に子どもたちの居場所をつくるには3つがある。それは「安心・主人公・成長モデル」であり、
- (2) 居場所づくりをしていく中で、「平和の舞台」を創ればより「いのち」の大切さを尊重する態度が育成できるであろう。
- (3) 全員が出演の舞台を現代版組踊として創れば、感動体験を得ることができ、その感動を観ている人たちにおこったことから再帰性としての感動も得ることできるであろう。また、発信を続けることで、より深い「平和」「いのち」の学習ができるであろう。

4 研究の実践

(1) に関しては3つのキーワードでまとめると、次のような実践を行ってきた。

「安心」…班ノートを軸に据えたクラス集団づくり

宿泊行事でのクラスミーティングから日頃の学活でもクラスミーティングができるクラスづくり

「主人公」…委員会活動にプラスして「学習・表現部」という自主的組織を立ち上げ、活動をしていった。メンバーははじめ40人、のちに55人になった。計画立案は自分たちで行い、次のように実行していった。

ア 大阪城公園付近の戦跡フィールドワーク（以下FWと略）とビデオどり大正区戦跡FW 証言者の方と一緒に

- う
- イ 大阪大空襲FWをクラスの人々に伝える
- ウ 大阪空襲を描いた作品の展示
- エ 証言者の方々にビデオレターを送る
- オ 群読をつくる
- カ 県立二高女の校歌の練習
- キ 勝連町の中・高校生とミニ討論
- ク 沖縄うるま市での「平和の舞台」の進行
- ケ 総合学習発表会の脚本づくり
- コ お世話になった方々へのビデオレターづくり



※当日は練習1時間発表2時間の長い舞台であったが、どの子も輝いていた。「このまま時間が止まればいいのに」と感想に書く子もいた。

プログラム

1. かじゃで風 (三中琉球舞踊とリーダーズジョイント)
2. クーダーカ (三中エイサー, 三中三線)
3. 豊年音頭 (三中エイサー)
4. 平敷屋エイサー (リーダーズ)
5. 谷茶前 (三中琉球舞踊)
6. 河内音頭 (三中河内音頭)
7. ぼくたち大阪の子どもやで (三中歌)
休憩
8. 群読 (リーダーズ)
9. 群読 (三中全員)
10. 冒険天国 (リーダーズ)
11. オジー自慢のオリオンビール (三中ものづくり)
12. 肝高の詩 (リーダーズ, 三中ジョイント)
13. レキオの夢 (リーダーズ, 三中ジョイント)
14. 終わりの言葉 (リーダーズ, 三中学習・表現部)

「成長モデル」…たくさんの方々との出会いの場を設定したが、子どもたちが目標にしていたのはリーダーズの活動・考え方であった。リーダーズの話は先輩からも聞いていて、一つの学校文化になってはいた。実際沖縄でリー

ダーズと出会い、舞台を創り、一緒に食事をし、討論をすることで、よりいっそう「一種のあこがれ」になっていった。修学旅行が終わってからも、リーダーズとの交流を続けたいという声が大きくあがり、次のことを行った。

ア ビデオレターを送る。

イ 何人かを3月までに学校に招待するために資金を集めた。方法はミニバザーと模擬店合わせて4回行った。

ウ 地域協議会主催のサンネットフェスタに、リーダーズから学んだ踊りを披露した。

エ 3月、招待したリーダーズの3人とともに「平和の舞台」を創った。

(2)に関しては

○人権学習(平和学習)と社会科との関連化を進める中で行っていった。人権の時間(平和学習)では ①戦争体験の聞き取り ②大阪大空襲を体験された方からの聞き取り ③大阪戦跡FWの報告会 ④沢田教一さんの生き方に学ぶ ⑤写真を使っのアクティビティ ⑥元白梅学徒隊の方々の証言を綴る映画「友の碑」を鑑賞

○社会科の時間では、討論授業を中心とし

た「現代」の授業を展開していった。

また、劇づくりの4つの学習・活動の視点からまとめると次のようになる。

1) 一つは作品をつくるための情報収集、取材、編集をしていく学びでは；

学校で行う「平和の舞台」の脚本を書いてみたい子が4人が出てきてくれ、さっそくその4人は、まず沖縄戦に関するシナリオを10編近く集めて読んでいくという作業からとりかかった。その中でBが自分の家のことをもとに書きたいと言う。彼女の祖父は、沖縄から疎開船で本土にやってきた。その船の名は和浦丸。対馬丸と一緒に那覇を出航した船だ。もともとは対馬丸に乗船予定が何かの都合で変わったとのこと。また曾祖父は沖縄戦で亡くなったが、どこで亡くなったかがわからない。まとめていく作業は大変だったようだが、なんとかBら4人は夏休み中に完成させ、対馬丸記念館にも脚本を送り、お褒めの言葉をもらった。修学旅行に行く前にも学習はしていたが、事後のこの学習は主体的なものになった。

2) 合意形成をしていくための学習では；

劇には2つのストーリーがあった。一つは和浦丸の話であり、もう一つは元白梅学徒隊の話である。元白梅学徒隊の話は、アメリカ兵の「ガマから出てきなさい」という声にどうするかを山場にしたいと教師側は願っていたし、子どもたちもこのシーンを考えたいと思っていた。修学旅行に行く前の6月に社会科で「あなたならアメリカ兵の呼びかけに外に出ていきますか。」の討論授業を行っていた。

出て行く

○どうせ出ていかなくは殺されるのなら、私は少しの可能性にかけてみたいと思いました。お国のためにとやってやっぱり自決するのは私は嫌です。捕虜になってでも生きたいというのが人間の素直な気持ちだと思います。

○99%出て行くと殺されるかもしれないけど、アメリカ兵が壕の中になげてくる爆弾で死ぬのならば捕虜になることは恥ずかしいし、つかまると何をされるかわからないけど、残りの1%を信じて私なら出て行きます。

出て行かない

- 出ていきたいけど、出て行かないと思います。出て行くと「日本の裏切り」として殺されるし、みんなが自決する覚悟まであるから、自分も出て行ったらアカンと思う。それにやっぱりここまで生きのびてみんなとがんばってきたし、出て行けない。
- 一人だけやったらきめらへん。私やったらこわがりやから、みんなにながされちゃうと思う。

この討論ではほぼ2つに分かれた。その後、実際ガマにはいるだけでなく証言者の方々のお話を聞いて、子どもたちの認識も大きく揺れ動いた。その揺れをふまえてこのシーンのセリフをどうしたらいいかを9月の社会の時間で考えていった。続いてこのシーンの役者にあたっている子どもたちにじっくり考えてもらった。役者にあっている子は、再度、元白梅学徒隊の資料を読み始めた。何度か劇の練習中話し合いをしていく中で、次のセリフが出来上がった。

脚本担当の子どもたちは この劇の題を「命水」とつけた。それは3つの意味がある。一つにはガマの中には水がなく、水を求める声があちこちから聞こえていたという証言から、沖縄戦を象徴するものとして。もう一つは、対馬丸の沈んだ海の水と手にすくう水がつながるという意味。それに水に平和の意味を込め、水が満たされた状態が平和の状態をさすという意味である。

3) 協働して一つの劇を創り上げる活動；

練習する時間は授業の中では10時間程度しかとれず、朝、昼、放課後の自主的練習の中で、子どもたちは仕上げていった。特に練習後、それぞれのパートでふり返りと

学徒隊1 「どうする！」
 学徒隊4 「水のみたい。」
 学徒隊3 「おかの顔みたい。」
 学徒隊5 「大きな声で歌 また歌いたい。」
 学徒隊2 「全力で砂浜走って。」
 学徒隊6 「てーだのもと、いっぱい手足を
 伸ばしたい。」
 学徒隊5 「そう、思い切り沖繩の潮風を胸い
 っぱい吸い込みたい。」
 学徒隊6 「いやあ！ やっぱり出ていかない。
 みんなから後ろ指さされる。（お
 びえた表情で）」
 学徒隊3 「そーよ。周りから何を言われるか
 わからない。」
 綾乃 「ねえ、みな子の夢はお医者さんになる
 こと、とみ子は歌手になって東京の舞
 台にたつことが夢だったね。すみえは
 川藤先生みたいな体育の先生になるん
 だっていつも言っていた。ゆりえだっ
 たらこの戦争であったことを小説に
 して世の中に出せるはず、きつと。私
 たちはこのいくさでたくさんのお友達
 を亡くしました。
 陽子さん、美代さん、春江さん、ふさ
 子さん、やえこさん、信子さん。…
 だからこそ、その人たちの夢を 私た
 ちがかなえるんです。
 こんな塚で死ぬために産んでもらっ
 たのじゃない。（一般住民を見ながら）
 こんな塚で死ぬために生まれたんじ
 やない。ここで死んではいけない。」
 綾乃 「生きたい。」「1%の可能性があるのな
 ら。」
 みんなで「やはり出ていきます。」

改善点を出し合い、次の時間につなげる話
し合いをする姿が見られるようになった。

4) 自ら発信そして受信する学習・活動の中
で；

劇の脚本は3回書き直されたのだが、最
 後の改訂版もセリフが抜けていた。それは、
 役者にあたっている子が暖めてきたセリフ
 であり、直前まで言葉をさがして言いたい
 ということで抜かしてあった。Bは最後に
 自分の言葉で言った。このBの言葉を受け
 てBの祖父が立ち上がり、発言をされた。
 『この劇の話は実話です。対馬丸に乗り込
 むことになっていた私は偶然にも和浦丸に
 乗り込みました。船の後ろで火柱があがっ
 たことを覚えています。対馬丸には幼なじ
 みも乗船していたのです。今61年前のこ
 とがありありとよみがえってきました。劇を
 創ってもらってありがとうございます』

『私は今まで祖父からの話でしか沖繩戦のこ
 とを知りませんでした。でも修学旅行をきっかけに
 沖繩戦のことをたくさん学びました。その内容は
 話でしか知らない私にとっては、想像以上につら
 く残酷なものでした。ガマという言葉は知ってい
 ても、そのガマの中で何があったのかは知りませ
 んでしたし、地上戦というのもどういふものかも
 知りませんでした。そして、沖繩戦のことを学ん

でいくにつれて「私は今まで何を聞いていたんだ
 ろう。何を理解していたんだろう。」と祖父の話
 をただ聞いていた自分を悔やみました。でも逆に
 学んでいくにつれて、自分から沖繩戦でのこと、
 戦争のことそして沖繩のことをもっと知りたいと
 いう気持ちが高まっていきました。この劇をつ
 くる時も、この気持ちを伝えたい、戦争での真実を
 伝えたい、祖父からの話を私だけじゃなくたくさ
 んの人に伝えたいという気持ちでいました。それ
 は遠い存在だと思っていた戦争が本当は自分と深
 いつながりがあると分かったからかもしれませ
 ん。』

(3)に関しては180名で取り組んだ現代版組
 踊では一人何役もするのが当たり前になる。
 多い子では4役あり、裏方も衣装づくり、大
 道具・小道具づくり、照明も出演者がこなさ
 なければならない。もちろんこれらのことは
 子どもだけではできない。保護者の方々に、
 協力していただいた箇所も多かった。そのた
 め、発表当日はたくさんの方々に観ていただ
 くことができた。

保護者の方の感想

○修学旅行に向けていろんな学習を見せてもら
 いたと前から思っていたところ、学習発表とい
 う形で見ることができ、喜びと共に感動しまし

た。毎日のように世の中を子どもたちがおこす恐ろしい事件が流れる中、時々我が子さえ信じられないのではないかとという親としてははずかしいような思いを持つことがある今日この頃、劇や踊り歌にと全身でぶつかっている三中3年生の姿をみせていただき、安心するとともに、子どもたちを信じていることができる気持ちを強く持ちました。前向きな素直な気持ちがとてもよく伝わってきました。沖縄に修学旅行に行き、戦争のこともそうですが、もっといろいろな自分の国のことも考えたんだと思いました。そして一人の親として人間として私もまたいろいろ学ぶ姿勢を忘れず、子どもたちに負けないように勉強していきたいものだと思います。(自分の身を正すことを子どもたちの姿を見ることで思いおこされます。)

○今こうして感想に書き出すと、また涙が出るほど本当に感動しました。唄からはじまって、劇と踊り、演奏、すべて心に訴えるものが伝わり、熱くなりました。うまく言葉に表せないですが、とにかく今の当たり前の事が当たり前できない、そんな流れの中に、こんなに一生懸命、そして皆が一つになり物作りをする、表現する、本当に素晴らしかったと思います。一人ひとりの顔を見て感動しました。涙が出ました。子どもが帰ってきたら真っ先に伝えよう、そう思いました。顔を見るなり“良かったよ”“本当に良かったよ!”そして“良かったね、こんな学年で3年間を過ごすことができて…”そう言いました。たった一度しかない大切な中学生生活を、こんな風に過ごせたこと、宝だと思いました。先生方、またご協力していただいた多くの方々、本当にありがとうございました。感謝の気持ちでいっぱいです。

発表の舞台の様子は、修学旅行でお世話になった元白梅学徒隊5人の方にもビデオ・DVDにして送った。5人の方からは返事をいただき、一つひとつを子どもたちに紹介した。

前略 お会いしてから早くも五ヶ月余り。皆さんお元気で通学されていることと思います。過日送って下さったお手紙、ビデオテープありがとうございました。

早速お返事を出すつもりでしたが、年末のせいでしょうか、最近雑事に追われ、落ち着いてビデオを見る機会がなく、やっと一週間前に現代組踊と脚本の「命水」を見せていただき、感激で一杯でした。

お返事が遅れ誠に申し訳なくお詫びのしようありません。ご免なさいね。…中略…

脚本を読んでいく中にあの恐怖と惨事が頭をよぎり、当時を思いださざるを得ませんでした。タイトルの「命水」を手にした時、あの時は…食事は2、3日は食べなくても、お腹が空いてご飯を欲しいちは思いませんでしたが、兎に角水が欲しい、死にそうだと限界になり鍾乳石からポタリ、ポタリと落ちてくる雫を、一晚中石ころの上に座り、飯盒の蓋に受け溜、朝になって口にしたら、舌の先にほんの少ししめりを感じただけでしたが、精神的に落ち着いたことは忘れません。

亡くなって逝った人達は皆水を要求し命絶えていきました。

戦禍の中で全ての人を経験した事だと思います。立派なタイトルをつけましたね。

多くの戦争体験者からお話を聞くことができ修学旅行の意義を充分活用できたのではないのでしょうか。あらためて平和の有りがたさを考えさせられたことと思います。

すばらしい発表会に拍手を送ります。

沖縄に対する理解と情熱に感謝致します。

来年は進学の日ですね。皆さん頑張ってください。

沖縄へお出かけの際には、お会いのできると思います。寒さに向かう折、皆さんお体にはお気をつけください。

お礼とお詫びまで

かしこ

感想や手紙から、子どもたちは自分たちが伝えたかったことが伝わっていることを確認できただけでなく、励ましや賞賛を受けたこ

と、それ以上に感動を自分たちが届けることができたことに、劇で表現した時とはまたちがった感動を覚えたのだ。

地域にもっと発信していきたいという子どもたちの声をうけ、11、12月には「本気にボランティア」という総合的な学習を行っていた。本校の総合学習のテーマは「つながり」であり、地域の方々にはいろんなご協力をいただいていた。これまでお世話になった方々に何かできることはないか、ということから考え、ボランティア活動とは何かを調べ、そして実際、それぞれの場所で活動した。企画はクラスや班ごとだったのだが、沖縄修学旅行で学んだことを地域に発信していくグループもあった。



- A組は半田幼稚園で、
B組はつばみ保育園で園児とともに沖縄の踊りを踊ったり歌ったり遊んだりした。
C組はスーダンの子どものために募金活動とミニバザーに取り組んだ。
D組はくみのき苑の高齢者の方に、沖縄で学んだことを披露したり、交流したりした。
E組は学校周辺の公園、道路清掃と西除川のゴミ拾いを行った。

5 成果と課題

「いのち」の大切さを学習を深めるための前提として子どもたちの居場所づくりに、つまり一人ひとりが違うからこそ関係が豊かに

なるようなつながりをつくることに重点課題を置いてきた。「安心・主人公・成長モデル」の3つの要素では、成長モデルが今の子どもたちは見つけにくくなっている。本校では勝連町のリーダーズのみなさんとの交流がモデルさがしのきっかけになっている。子どもたちは卒業式の答辞でこう表現した。「一生懸命にすることはかっこよい」と。この言葉は次の学年、さらには次の学年にまで広がり学校の一つの文化になっていると思われる。

「平和の舞台」を現代版組踊で行っていったことの成果としては、子どもたちに達成感と充実感以上に感動体験をさせることができたと思う。この感動は子どもと子どもを結びつけ、さらには地域・保護者と子どもを結びつけることにもなった。卒業後も活動したいという子どもたちの声をうけ、保護者・地域の方が彼らの活動を支援する会を作り、公民館も今度は地域での居場所づくりという視点から、「表現倶楽部 うどい」を事業として立ち上げていただいた。この「うどい」には13歳～19歳までの青少年が集っている。この「うどい」には、地域の小学校から踊りを教えてほしいという依頼もある。先輩がひたむきに踊る姿を見て、小学生があんな先輩になりたいという声をあげる。それははじめて出会った5年前の子どもたちが、リーダーズを見た時と同じ声なのだ。今度は自分たちが成長モデルになっていっている。

劇づくりではの4つの学習をふまえたことで、子どもたちがもう一度構成劇を創る力をつけたとも思う。というのは、卒業後も子どもたちはもう一度「命水」パート2をしたという思いがあって、2006年8月6日公民館で「平和の集い」で現代版組踊を行った。これはもちろん子どもたちだけでなく公民館の方や保護者それに地域の方々の支援があってできたものだが、3年生時につけた力が生かされたからだと思う。その脚本には沖縄戦での元白梅学徒隊が描かれていたが、中学3

年生時よりも深い表現ができていた。

この実践を進めていく中で、実に多くの方々に関わっていただき、ご協力を仰いできた。そのネットワークをいかしながら、学校だけでなく地域の居場所づくりをふくめた視点を持ち合わせていきたい。また、「一生懸命することがかっこいい」という言葉が、言葉だけでキャッチコピーで終わらせないためにも、日頃の子どもとの関係、子どもと子どもとの関係を豊かなものにできる居場所づくりを今後も行っていきたい。

6 | 終わりに

卒業式後、子どもたちは夢を語った。それは「命水」をさやかホールで再演したいというものだ。また、リーダーズに負けないように自分たちもオリジナルな歌と踊りを創りたいという夢を持つ子もいた。夢はみるだけでなく叶えるもの。保護者・地域の方々が支援体制をつくってくださり、2007年3月31日大ホールにて新「命水」を上演することが決まった。この舞台にはリーダーズも10人ほどかけつけてくれるとのことだ。

〈参考文献〉

- (1) 白井利明「生活指導の心理学」1999年
勁草書房
- (2) 渡辺淳「教育における演劇的知」2001年
柏書房